
30分

馬河童

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

30分

【著者名】

N4053F

【作者名】

馬河童

【あらすじ】

本日（2008年11月1日）、とある小説賞に投稿していてボツになつた作品です。短編にしてはちょっと長いですが、一気に読んで頂きたいので連載扱いにしていません。

あと30分ある。

何をしよう。そもそも「30分もある」なのか、「30分しかない」なのか、よくわからない。いずれにしてもあと30分、秒に換算すると1800秒だ。そんな間に一体何が出来るだろうか。金に糸目はつけないから、楽しい事がいい。今まで縛られてきた分、一気に欲望を開放してやろう。

最後の晚餐ではないが、美味しいものが食べたいな。何がいいだろう。寿司、焼肉、いや、パスタはどうだ？ううん、フランス料理もあるし、高級懷石も捨て難い。中華のフルコースなんかもいいな。おお、行列の出来る店のラーメンもあるな。

ちょっとパソコンで検索してみるか。おっ、このラーメンうまそうだな。「500名様に一杯無料券プレゼント！」か。とりあえずクリックしておいて……。一応、申し込んでおくか。なんて事をやつていたら、もう一分経っているじゃないか。

飯はダメだ。調理する、される時間と、それを待つのが無駄だ。そもそも時間的に店へ行くのは無理だし、調理したら、それだけで30分終了だ。実際、もう1分半経ってしまっている。時間を有効活用するならカップラーメンくらいが関の山か。それにしたって湯沸し3分、待ち3分、食事5分で11分も掛かるのか。だったら飯なんていらぬぜ。

そうだ、最後の晚餐で思い出した。イタリアへ行きたいや。これも30分じゃホームページで見る程度だな。ミラノ、ファツショナブルでいいなあ。ローマもコロッセオをはじめとして古い遺跡や建物がたくさんあっていい。水の都ベネチアも素晴らしい。ポンペイ遺跡やピサの斜塔、青の洞窟もあるぞ。30分どころか、何日あつても足りなそうだな。おっ、クリック一つでイタリア旅行プレゼントか。当る訳ないが、クリックだけでもしておくれ。ポチっと

な。

まあどう考えてもビニードームドアでもなければ時間的に外国は無理だけれど、せめて近場で行ける所はないか……。

ないな。あと27分しかない。海や山には辿り着けないし、近所の公園じゃしけていいしなあ。

読みかけの本でも読むか。今読んでいた本は……ダメだ、あと500ページ以上もある。相当の速読力がなければ読み終わらず、スッキリしない気分になってしまっただろう。もしクラスマックスまで読み進みながら、時間切れにでもなつたら目も当てられない。

面倒臭い、寝るか。いや、それは意味がない。死ねばいくらでも眠れるではないか。生きている限り、なるべく睡眠時間は削るべきだ。1日8時間も寝るのは本当に時間の無駄だ。ナポレオンを見習つて、3時間睡眠で済ませるより心掛けなくては。とにかく今寝るのはよそう。

おっと、あと25分だ。もう5分も経つたのか。まだ何もしていないぞ。何か画期的な事はないか。

25分で新たな恋を探すというのはどうだ。面白いんじゃないかな。ただ、具体的にどうする。町へ出てナンパでもするか。いや、人がたくさんいる所へ行くまでに時間が経過してしまう。じゃあ知っている女に片っ端から電話でもするか。片っ端と言いながら何人もいないけれど。それに、こび電話したら一人目で20分以上過ぎそうだな……。まさか、「

「もしもし?」

「ちゃん、君が好きだ。今から25分以内に付き合ってくれ」なんて風にやる訳にもいくまい。どうしたって時間が掛かりそうで、恋が成就しそうにない。

ダメか……。25分の恋なんて、面白いアイデアとは思つたんだが。いや、待てよ。今は出会い系サイトなんていうのがあったな。あれを恋というのかどうかはわからないが、携帯電話でチョチヨイと出来るつて聞くし、試してみるか。まずはサイトの中で会員登録

してと……。お、もう残り20分か。

「初めまして。恋は一瞬の花火の如し、なんて言いますが、私と20分で恋しませんか。とにかく時間がありません。インスタントな恋愛が出来る方だといいのですが……。よろしければ是非お願ひします」

こんな感じで送信してみるか。とりあえず送れそうな女性10人くらいに片っ端から送ってしまう。下手な鉄砲も数撃ちゃ当たるだろう。

よし、出したぞ。頼むから誰か返して来てくれよ。後は返事を待つとして、他に出来る事を考えるか。

そうだな。出来ればSEXがしたいな。でも相手がいない……。タレントの みたいな綺麗な女としてみたいなあ。さつきの出会い系を待つていられないし、すぐに可能な相手もいないし、一人でするしかないか……。それも虚しいな。でも久しく放出しないし、残り10分切つたらもう一度考えるとするか。

あちやー、あと17分になつているよ。小便行きたくなつてきたな。行くか。いや、それだけで2分は掛かるぞ。時間が勿体ないから我慢だな。いざとなつたらその場でしよう。みつともないが、とりあえずはその場で地団駄踏んで回避だ。

そうだなあ。他に……、うーん、ただ考えてみるか。ロダンの「考える人」のように。あんな風に考え続けたら、何か素晴らしいアイデアが出るかもしれないぜ。脚を組み、頬に手を当て、目を瞑り……

ダメだ。時間がない事に焦つて、しかも小便が漏れそうで、落ち着いて考える事が出来そうにない。

やっぱり小便行こう。田先の2分をケチつて、全てを台無しにするのもバカバカしい。とにかく出し切つてしまわないと、次の事に移れないぞ、これは。

あーっ、気持ちいい。やっぱり排泄欲つて重要なだよな。汚いけれど、気持ちが良いのもまた事実だ。これが尿道結石なんかを患つて

いたら、とんでもなく辛いんだろうけど。

そんな事より終わらないくらい尿が出続けて時間を口スしている事の方が、今の俺には辛いな。まだ出るのかよ。早く終われ。終われ〜、ちくしょう。いくら振つても漏れてきやがる。

げつ、今ので3分経つていい。あと14分か。もうパンツに染みてもいいや。とりあえず履こう。うつ、やっぱり漏れた。パンツに丸く黄色い染みが出来ていやがる。

まあいいや、時間には代えられない。多少温つて気持ち悪いけど、このまままでいよう。今はパンツを履き替える時間すら勿体ないからな。

「ピロリロ～ン」

おつ、携帯が鳴った。タイトル『美穂です』って、わっさの出会い系か。『今から会いませんか?』だつて。おつ、会おう。もしかして20分の恋が成就するかな。

「今すぐ会いましょう。何処で会えますか?」

まあこんな感じで送るか。うまくいくといいなあ。面白くなつてきたぞ。あと12分になつたけど、急に展開が開けてきた。どんな子だろ?。プロフィールでも見てみるとするか……。ゲッ、54歳独身……。

「こんな年になりながらまだ処女ですけど、是非初めての人になつて下さい」

だと。写真の綺麗さに騙されて、年齢まで確認しなかつた。しかも「54歳で処女」つて本当かよ。

「ピロリロ～ン」

またメールだ。『美穂です』つてまたか。『今から行つてもいいですか?』なんて書かれているけど、これは無視だ。ちくしょうまた時間を無駄にした。

「ピロリロ～ン」

もう一件来た。また『美穂です』だ。どうなつているんだ、こいつ。『忘れていましたが、お金の心配はありません』だつて……。

ちょっとグラつくな。

「ピロリロ～ン」

またメールか。相手は『美穂です』……。しつこ過ぎだろ。『私の裸の写真を送るので一度見てみて下さい』だと、見るか、そんなもん。54歳だろ。

いや、ちょっと気になるな。ちらつとだけでも……。うおっ、これ本当に54歳か? ナイスバディじゃないか。胸は張りがあつて丁かいし、ウエストのくびれも抜群、そして薄い陰毛の茂みの中に目が見え隠れしているじゃないか。

拡大だ。この画像を拡大しよう。パソコンで画像を処理して、局所を拡大と。うおっ、すげえ。本当に54歳か?

どうする。このおばちゃん、もうちょっとやり取りしてみるか? うーん。54だぞ。でも魅力的な裸体だ。ひょっとしたらサクラのような気もするな。

ちょっと待て、もう時間的に悩んでいる場合じゃないぞ。ガーン、あと8分になつていい……。もうヤケだ、このおばちゃんに集中するしかない。今から会うしかない。

「私の住所は 県 市123番地456です。本当に興味があるのなら、今から来て下さい。よろしくお願ひします」

これでどうだ。あと数分で来てくれるのを待つしかない。

で、この後どうしよう。もう何分もないぞ。まあこんなもんか……。いろんな事の積み重ねで人生浪費していくんだろうなあ。もう一回、最初から考えたら今度はうまくいくかな。無理だろうな、やっぱり。考える事を考える時間が必要な気がする。で、その時間を捻り出するのが勿体なくて、結局やらなくて……の繰り返しになりそうだな。

大体、哲学者って一日中考えていられるのかな。結局、今の俺と同じように何かと煩わされて、大して考えがまとまらない事が多いんじゃないだろうか。昔の哲学者が素晴らしい考え方を次々に出来事が出来たのも、ある意味する事がなくて暇だったからじゃないの

か。今の時代は情報が溢れ過ぎていて、頭が休まる時がないよな。

日常生活を送りながら、やれ携帯電話だ、パソコンのインターネットだ、ＴＶを見なきや、ビデオを録らなきや、本も読みたい、とならば、人間、自由な思索に耽る時間など取れる筈がない。何でも一瞬で判断して物事をこなすような天才児でもない限り、それこそ山に籠つて仙人にでもならなければ無理な話だ。『われ思うゆえに：

…』なんて自分で思つていて暇すらありやしない。

でもこうして30分丸々考える余裕つてなかなかないよな。大体、暇があつても人間、絶えず何かをしているものだな。30分一生懸命使つて物事を考えてみるなんて思いもよらなかつた。そういう意味ではこの30分も意味があつたのかな。

そうだ。せめて一回発射するくらいはしよ。長らく拘束されたから全然出せずにつまつているからなあ。それに発射で終わるもの、いかにも制限時間終了の合図つて感じで洒落ているしな。オカズは……仕方ない、さつきの写真でいくか。

あと5分か。5分あれば一発くらいは発射出来るだろう。それまでに美穂54歳が来てくれれば最高なんだが。とにかく擦れ。

「ピンポーン」

おっ、もう来たのか？せつかくパンツ脱いだつていうのに。とりあえず履かない。でもせつかくの発射準備を無駄にしたくないので、ズボンのポケットに手を入れながら刺激を与え続けるとしよう。よし、準備完了。

「はーい」

わくわく気分でドアを開けるぞ。ゲッ、全然写真と違つおばさんじゃないか。騙しやがつたな、こいつ。

「読日新聞です。お客様、今現在、新聞は取つていらっしゃいますか？」

「し、新聞？ 美穂さんじや……」

「美穂？確かに私の下の名前はミホって言ひますが。お客様と何かご縁が？」

「いえ、じゃあ関係ないですね」

なんだこのおばさんは。時間がないのにこんな新聞勧誘に付き合わなくてはならないなんて、本当にツイていなーいぞ。何とかポケットの中で性器に刺激を『えてはいるものの、おばさんの風貌も酷いし、萎えてしまうのも時間の問題だ。

「いーえ、関係ありますわ。ミホといつ方をお待ちでしたのね。これも何かの縁です。是非、読日新聞の『』購読を」

「け、結構です」

「結構、という事はお取りいただけるという事ですね。では、こちらにサインをお願いします」

「ふざけんな」

「いっ、屁理屈言いやがって。こんな奴、相手にしてられない。このしつこさに対抗するには無理にでも扉を閉めるしかない。

「ちょっと待ってください」

「足を引かないと挟みますよ」

何たる強引さか。おばさんは閉めようとすの扉に足を差し入れてきて、何とか最終防衛線を守ろうとしている。

「と、取ってくれるまで引きません……」

「こつちは時間がないんですよ。急いでいるので勘弁してください」

「それはこちらも同じです。早く一つでも契約を取らないと」

「そんなの知った事じゃないですよ。とにかく俺にはもう時間がなあんだ」

「じゃあ、これだけ。これだけ書いてください」

つて、出してきている書類は契約書じゃないか。これだけも何もあつたもんじやない。

「いい加減にしてください。そんな事をやつしている場合じゃないんだ」

面倒だから、放置しておくしかない。気にせず居間へ戻り、時間を有効活用しなくては。

「待つて。わ、私も中に入つていいんですか~」

「お好きなように！」

本当に今まで付いてくる気らしいが、無視だ。放つておけばいいんだ。見られようが、発射を止める気もない。

「ピロリロ～ン」

おっ、メールの返事が来たか。でも、今は摩擦スピードを緩める訳にはいかない。30分以内に何か一つ成し遂げるには、この射精だけは譲れない。右手で携帯電話をいじりながら、左手で性器を擦るつきやない。

『美穂です。今から行きます。ベッドでお待ち下さい』

だつて。やつた、と喜んでいいものや。。。54という数字が脳裏に浮かびまくるぞ。でも新たに添付されていたこの写真はいい。先程以上に悩ましく官能的で、到底54歳には見えない。時間ギリギリの俺を救う一枚だ。横にいるミホつていうおばさんが邪魔だけれども。

時計を見ると、29分6秒経過。あと54秒じゃないか。これも何かの縁。写真を拝みつつ、左手の速度をアップだ。

「つうおお～っ。はあっはあっ……。これはキツい。でもこれだけはやり遂げたい。頑張るんだ、俺。

「す、凄い大きさ……。恥ずかしい。これ以上見ていると、私の方

が……。き、今日のところは失礼します……」

さすがに新聞の勧誘も諦めたようだ。まあこちらとしても、こんなプライベート丸出しの瞬間を見られるのもたまたもんじゃないけれどね。あ、でも名刺と申込書だけはちゃんと置いていつていやがる。さすがの根性だな。俺も見習わないと。

残り30秒か。もう時間は気にしない。頭を54歳、いや美穂だけ、いや美穂の身体、いや美穂のアソコだけにするんだ。ラストスパートをかける。うおお～っ。もう少しで、出るっ……

「ブーツ」

ゲッ、終了のブザーだ。今にも出そつなのに……

「終了だ。一切の行為を禁止する！」

映画『マトリックス』のグラサン男、エージェントスミスみたいな奴が3人来て、俺を押さえつけやがる。今にも発射しそうなペニスは……、うつ、根元を紐できつく縛りやがった。逆流でもしそうな勢いだ。くそつ……。

「おいつ。止める。離せ。せ、せめて発射だけはさせてくれ……」

…

その頃、男が連れて行かれる様子をモニターで見ている者達があった。3人の科学者風の白衣を着た男達が、大きなディスプレイを前に、この30分間を黙つて見守つていたのだ。

「ほらな、やつぱり無為に過ごしてしまっただろう。斯く言う我々もこんなものを見るのに30分も使つてしまつたぞ」

一番老年風の男が口を開いた。

「ジジー博士、まあ今回は出所間際の囚人という、欲望を抑圧された者だったので、このような結果となつてしましましたが、条件を変えればまたいろいろな発見もあるんじやないかと」

答えたのは最も若く、意欲に燃える感のある男だ。

「条件？ 例えばどんなものかね、ロッティ君？」

「例えば、学習した今の男をもう一度使うとか、女にするとか、裕福な者とか、浮浪者とか、子供とか、老人とか、様々な条件が考えられますがね。もつと発展させれば、恋人や友人同士、親子や夫婦なんかの二人組にしてみても面白いのでは」

「どれも同じじやろう。そんな事例を試して、下手に恋人同士のいやつく姿でも見せられでは、たまつたものではないわ」

「否定ばかりされますが、そんな事はないですよ。きっと参考になりますよ。今のでさえ、一つのデータにはなります」

「ふん。ロッティ君よ、今の行為の何処が参考になるといつのだ？ ただ墮落した人間の様を見せられただけじゃないか」

「『30分間与えられても、人は何をする事も出来ない』といつの

がわかつただけでも意味はあるんじゃないでしょうか?いや、そうとも言えないかも知れません。先程も言いましたが、私はこの事例を見たが故に、これが当然の帰結なのか確認するためにもさらなる検証を重ねたくなつてきました

「こんな無駄な作業を何度も繰り返すのかね?」

「無駄かどうかはやつてみなくてはわからないでしょう。先人の研究でも、無駄と思えることの積み重ねがあつて、今の成功があるのではないですか?ベタな話ですが、あのエジソンだつて数々の失敗を繰り返した上で、発明王の称号を得たのではありませんか。それにはの野口英世だつて自身が黄熱病にかかりながらもその研究を成し遂げています。それに 先生だつて……、 博士だつて……」ロッティは次々に失敗からの成功事例を挙げたが、ジジーはうんざりしたような顔をしてそれを遮つた。

「詭弁を弄しおつて。無駄に決まつとる。先程の男を見ただろう。いたずらに欲望の捌け口のみ求め、それでいて優柔不斷で何もせぬまま終えてしまつたではないか」

「確かに発射すら出来ませんでしたな」

ここで今まで黙つていた男が、やはり寡黙な調子で口を開いた。名はアイスマントいう。その名の通り冷静で落ち着いた雰囲気の科學者である。

「それこそ意味があるではないですか。こんな風に人間が時間を有効に使えていない事に、現代社会の病巣があるとは思えませんか?その解決の糸口でも掴めたらどんなに素晴らしいことか」

「はん。ロッティよ、夢物語も大概にするんじやな。そんな事を我々が示してやつて、何か変わるとと思うか?」

「変えましようよ。それが我々の夢じやないです。この研究が発展すれば、将来、時間を膨らますような装置の開発だつて夢じやないかもせんよ。ジジー博士も昔言つていたじやないです。人の時間感覚を変える装置の開発をしたいつて。1分を1時間にも等しい感覚で過ごせるよつな夢の世界を作るのじやなかつたんですね

か？」

「それが夢だと呟つんじゃ。その頃にはわしほどり死んでおるわ
「確かに的を射ている」

「何おつ！」

「自分で夢だと言いながら否定されると怒る。まさに傍若無人な振
る舞い」

「かうつ。アイスマン、お主はその冷静に分析する性格、どうにか
ならんのか。それを修正する方がよっぽど早く終わりそうじゃ」
「確かに的を射ている」

「ふつ」

思わずロッティも噴き出してしまった。

「一人してふざけあつてからじ。わしは眞面目に話しておるんじや
ぞ」

「私だつて眞面目に話してます」

「右に同じ」

「くうつ、いちいち癪に障る奴じやのつ」

「ジジーさん、落ち着いて下さい。ある意味無駄な会話をしない分
だけ、アイスマンさんがよっぽどこの研究向きかもしません。
我々に比べて必要な発言しかしないので、時間を浪費していません
よ」

「それはそうじやが……」

「それに我々がいがみ合つても何の意味もないではありますんか。
本題はこの研究について検証する」とですよ」

「見事に的を射ている」

「けつ。じゃあ、アイスマンに聞くが、お主はこの研究、どう思つ
ておるんじや？」

「無駄かどうか判断するのはこれから的研究次第。この一回にだけ
ついて言えば無駄な可能性大」

「ほれ見る。お主も無駄だと思つていいんじやないか。どうだロッ
ティ、2対1だぞ」

「可能性大と言つているだけで、無駄と決め付けた訳ではないでしょう。そうですよね、アイスマンさん？」

「その通り」

「それじゃあ、アイスマン、お主はどうしたいんじや？」

「今後、複数事例をもつて検証。統計学的に少なくともあと49件の検証が必要」

「49件じゃとー」こんなものあと49回も見なくてはならんのか」「時間にして24・5時間ですな。検証の時間も含めれば50~100時間は要するでしょうね」

「バカバカしい。そんなに時間を使つていられるか。わしは忙しいんじや」

「そんな。時間にしてみればたかだが1日~2日分じゃないですか。ジジーさんお願ひします」

「あんな、わしももう年じや。2日と言つたが、人選等の準備も考えればそれではすまんじやうつ。あと何日生きられるかもわからんのに、こんな事の検証に何日も使っていられないわい」

「人生の時間が尽きようとしておられますからな」

「おのれ、アイスマン! お主は人を愚弄してばかり……」

「時間がない割には、怒る時間は十分にある御様子」「くつ……」

「ジジーさん、アイスマンさんの言う通りですよ。こんな事をい合つている時間があるなら、十分実験や検証の時間を捻出する事が可能ですか」

「さよう。かく言つ我々の議論も既に30分が経過した。これではあまりあの男と変わりませんな。やはり人間は30分という時間を効率良く使えないという証明ですかな」

アイスマンが時計を見て言つ。それを聞き、全員が一瞬沈黙した。皆が自分以外の人間の顔を眺め回す。しかしその瞬間、

「ふつ。あ~はつはつは

ジジーが笑い出した。

「ジジーさん？」

「負けたわい。お主らの言う通りじゃ。こんな風に無為な30分を過ごしておいて、偉そうな言もあつたもんではないわ」

「そ、それじゃあ？」

「最後まで協力するわい。これで死んだら、わしの人生そのものが無駄だつたと、報告書の隅にでも書き残しておいてくれい」

「はつはつはつは

アイスマンも含めて3人が笑つた。こうして研究は継続される事となつた。

研究が継続され、半年を掛けて女・老人・子供から、カップル・夫婦・親子など様々な事例が試みられたが、無為無策に30分を過ごす者が後を絶たなかつた。皆、最初は余裕ぶつておきながら、終盤間際になつてアタフタし出して、結局何も出来ずに終わるというパターンがあまりにも多かつた。予想通りの事態にジジー博士が

「ほれ見ろ。言わんこっちゃない」

と再びキレかかりそうになつた頃、ロッティから驚くべき検証結果が出てきた。

「これを見て下さい」

ロッティが見せたのは最初の被験者についてのデータだつた。

「あの射精未遂の囚人じやろう。あんな男から何がわかつたと言ひんじや？」

「まず、ホームページ上で申し込んだラーメンの無料券とイタリアへの海外旅行が当選しています」

「ふん。そのくらい、どうつて事はないじやろう」

ジジーが歯牙にも掛けないといった表情をした。

「だが、30分が無駄だつたとは言えなくなる」

「そう。アイスマンさんの言うとおり、まずは効果が出ています。しかもそれだけじゃないんですよ」

「何じや、1億円でも当たつたか

「刑務所を出所後、例の出会い系サイトの54歳女性と結婚しました。それに……新聞の勧誘が来たのを覚えていますか？」

「ああ。それにも負けず、あの男は自慰に励んでいたのう」

「あの新聞の勧誘員は愛人になっています。女の方が彼の変態性に惹かれたようです。出所後、ストーカーまがいの行為を繰り返した後、新聞の契約だけではなく身体の関係をも勝ち取ったようです」「な、何たる節操のなさ……」

「驚くべき効果である」

アイスマンが呟く。さすがのジジーも驚いているようだった。

「まだあるんですよ」

「ま、まだあるのか？」

「あの時、彼は自慰の最後を封じられましたよね？あれがそれまで100m走世界記録のタイムに近かつた早漏の治癒に繋がったそうです」

「医学的効果……」

「また、本を読む時間の勿体なさを悟り、1分間に30ページ読む速読術を身に付け、睡眠時間が3時間でも熟睡出来る睡眠方法を開発し、フードファイター並みの早食い技術も得て……」

「な、何でもありじやのう……」

「そして最も驚くべき事は、あの時の考察経験を基に、哲学者になつたとのことです。30分間悩みに悩んだ事で人生の真理を見つめたとか何とか……」

「て、哲学者じゃと？あの優柔不断な阿呆が……」

「私も驚きました。あの時は無駄だと思いましたが、30分そのものには何もなくとも、意味はありました。彼の場合、ほぼ全ての事象が、何かをやつた事によつて繋がっています」

「うう～む。頭が痛くなってきたわい。少し夜風に当たつてくる……」

「同じく困惑・混乱・混沌……」

ジジーとアイスマンは疲れた顔をして、研究室を出て行つた。――

人残されたロッティは再度、最初の実験のデータを覗き込む。

「う～む。一概に30分が無駄だったとは言い切れないものだ……。
他の事例でも後々このような事が起こりうるのであろうか……」

彼は考え込みながら室内を歩き回る。何か考えが浮かばないかどうか、思案している様だ。そしておもむろに立ち止まると、室内の巨大なモニターに向かい拡声器を使ってこう言った。

「ところで、この報告を読んだあなたの30分は有意義でしたか?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4053f/>

30分

2010年10月8日15時04分発行